

児童が居心地の良さを感じる学級経営

—道徳の授業と学級活動のパッケージ型ユニットの実践を通して—

児童生徒発達支援コース 生徒指導・教育相談系
櫻井 祥子

I 主題設定の理由

1 今日の課題

内閣府によると、近年、若者の中には、学校や職場などの集団の中での人間関係がうまく築けなかったり、維持できなかったりしたことをきっかけとして、不登校、ひきこもりなどの状況にある者や、周囲と十分なコミュニケーションが取れずに孤立し、心を開いて悩みなどを相談できる相手がいないなどといった状況にある者もいる。これらの者は、自分ひとりで悩みを抱え込む状況が続くことにより、様々な問題を複合的に抱えた状態に陥ることが懸念されている。

小学校学習指導要領の総則第4節「児童の発達の支援」に「学習や生活の基盤として、教師と児童との信頼関係及び児童相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること」と記されており、学級経営の充実と児童相互の好ましい人間関係づくりの重要性が示されている。

上記のことから、不登校や引きこもりといった諸問題の解決のためにも、児童相互のつながり、よりよい人間関係の育成や安心して過ごせる居心地の良い学級環境づくりが必要だと考える。

2 本学級の児童の実態

本学級は、小学校第4学年男子16名、女子17名計33名の児童が在籍し、特別支援学級から男子1名が通級している。

児童たちは、素直で明るく、元気がよい。困っている人がいるとすぐに声をかけて手助けをしたり、プリントやノート類の配達や給食の配膳などは当番ではなくても進んで行ったりすることができる。

しかし、4月に習字で「今年の目標」を書かせた際に、33人中10人が「自信」と書いていたように、自分に自信を持つことができていない児童が多い。授業中に、自分の意見を発表する際にも、ノートやワークシートに意見を書くことができていても、ペアやグループで話し合い、自分の意見を肯定してもらってからでない、進んで発表することができなかった。

また、些細なことでも他者の失敗を指摘してしまったり、自分の過ちを素直に認めたりすることができず、トラブルになってしまうこともあった。

この状況から、児童が自他の言動を肯定的に受け止め、互いに認め合えるような関係づくりをしていく必要があると感じた。

II 先行研究

1 居心地の良いクラス

小野田(2012)は、「居心地の良い学級」とは、①児童間の親しさ、②学級への満足感、③自然な自己開示の3つの側面を十分に満たしている状態を指すとしている。また、学級内コミュニケーションが児童間の親しさや自己開示態度の上昇に寄与し、学級への満足感に影響を及ぼす可能性があるとして示唆している。

品田(2016)は、仲間の成長や良さを言語化することを通して、自分もそうなりたいという目標を持ち、自身の成長につながる可能性があるとしている。互いの考えや良さを認め合う場を設けることで切磋琢磨し合い、集団も個も成長し、学級全体の満足度の高いクラスになると述べている。

これらのことから、他者と関わり合う活動を意図的・計画的に設定し、自分の考えを言語化する取り組みを通して、学級内コミュニケーションを高めることで、自他の良さや考えを理解し、認め合うことがしやすくなり、児童にとって居心地の良さを感じられる学級につながると考える。

2 道徳授業と学級活動

柳沼(2013)は、従来の道徳授業をそのまま教科化してもそれほど実効性は高まらないとし、児童の日常生活の問題解決に役立つようなスタイルに道徳授業を根本から再構築する必要があるとしている。生徒指導や特別活動(学級活動)とも関連・連帯しながら、現実的な問題にも対応できる問題解決的な道徳教育の必要性を述べている。また、道徳授業で道徳的行為や習慣について省察を深めることで、児童が過去や現在の生活を振り返ると共に、将来の生き方を展望することも推奨されることになるともしている。

このことから、道徳授業を通して道徳的行為や習慣、考え方について省察を深め、自分自身の生活を振り返り、認識の変容を促すことと、学級活動において他者との関わりを重視した活動を両輪で取り組むことで、日常生活の問題解決に役立てることができ、児童の人間関係づくりの育成や居心地の良い学級づくりにつながる。すなわち、道徳授業と学級活動の実践を柱として取り組むことで、より一層の効果が期待できる。

3 パッケージ型ユニット

田沼(2017)は一定のテーマに基づいた小単元プログラムを「パッケージ型ユニット」と称し、学習プロ

セスを構成することで、児童一人一人の内面で調和的な学びを実現することができるとしている。児童に必要な「育成を目指す資質・能力」を明らかにした上でテーマ設定することで、さらに効果がある。また、パッケージ型ユニットのパターンとして、テーマにより迫るためには、他教科・他領域とも関連させたクロス・カリキュラムで取り扱うことも示している。

このことから、児童に身に付けさせたい資質・能力からテーマを設定し、道徳授業と学級活動とを関連づけたパッケージ型ユニットを行うことで、より効果が期待できる。

4 小さな道徳

「小さな道徳授業」とは、鈴木（2017）が提唱する10分から15分程度でできる道徳授業のことである。鈴木は、道徳の時間は学級づくりの時間であり、ねらいを明確にして授業を行えば、道徳の授業で児童の認識がどのように変容したかを捉えることができるようになるとしている。そして、道徳授業での児童の認識の変容は、日常生活の場面での言動の変容にもつながり、それを教師が的確に把握し、評価することが大切である。個人の評価としてフィードバックするだけでなく、学級全体に波及することで、一人の児童の心の成長が学級集団全体の成長につながると述べている。

このことから、ねらいを明確にした道徳授業を行い、児童の認識や日常生活での言動の変容につなげ、教師が写真や言葉、学級通信を活用した評価を学級全体に対して行うことで、より効果が発揮されると考える。

Ⅲ 研究の方法

1 研究の仮説

- | |
|--|
| <p>①児童の実態に合わせたテーマを設定し、道徳の授業と学級活動を組み合わせたパッケージ型ユニットを実施することで、自他の良さや考えを理解し、認め合うことができるようになるだろう。</p> <p>②児童の認識や日常生活での言動の変容を教師が捉え、個人や全体、家庭へ発信し、価値づけることで、互いに認め合い、自他の成長のために協力できるようになるだろう。</p> |
|--|

2 研究に対する手立て

①パッケージ型ユニット【仮説①②】

・道徳授業

学習指導要領では、道徳授業は答えが1つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題として捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」へと転換を図ると記されている。児童の実態に合わせて、テーマを設定し、時には教科書教材を離れ、自作教材も用いる。その教材ならではのねらいを設定し、導入や発問、児童の認識をゆさぶる発問等を工夫する。パッケージ型ユニットの前後で、児童自身が変容を自覚することができ、前時の授業

とのつながりを意識することができるようなワークシートを作成する。さらに、テーマに合わせた小さな道徳の授業を組み合わせることで、問題意識の持続や向上につながり、児童により一層の認識の変容を促し、自他の考えや良さを理解し、互いに認め合えるようにする。

・グループアプローチを取り入れた学級活動

品田（2017）は、構成的グループエンカウンターを活用し、自己理解や他者理解のチャンスがある体験を多く設定することで、全体の共感性を高めていくことができるとしている。特に、振り返りで自分や友達についての気づきを表現させ、グループや全体で発表し合う活動を日常的に行えば、自己理解や他者理解につながり、共感性を育むことができるとする。

このことから、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキル教育を中心とした学級活動をパッケージ型ユニットのテーマに合わせて実施することで、児童が他者との関わりを深め、相互理解を促す。

②学級アンケート【仮説①】

・学級風土尺度を基にしたアンケート

学級風土尺度とは、児童の人間関係と学級風土の変化を測定するために、伊藤、松井（2001）の学級風土質問紙を参考に小野田が抽出し、小学校の学級風土測定に適すると判断したものである。「児童間の親しさ」「学級への満足感」「自然な自己開示」の3尺度を抽出したものを使用する。回答方法は、各項目について「4. そう思う」～「1. そう思わない」の4件法で評定を求めるものである。

月末に学級風土尺度と自由記述欄を設けたアンケートを実施することで、児童の実態を把握し、道徳の内容項目の選定や重点課題発掘に役立てる。

③レインボードと学級通信【仮説②】

「レインボード」とはRainbowとboardの造語である。児童同士、児童と教師とのつながりを表現したいという思いから名付けたものである。レインボードには、日常生活や道徳の授業などを通して見られた児童の姿、一人一人の児童の成長や学級全体の成長の様子を写真や言葉で載せる。教師が児童の変容を把握し、変容が見られた児童にフィードバックすることはもちろん、その気づきを学級全体に伝えることで価値づけることができ、学級全体の成長にもつながる。

また、児童の心の育ちをより大きなものにしていくために、学級通信を発行して、家庭にも伝えていく。学校と家庭とが連携し合うことで児童の成長をさらに促す。

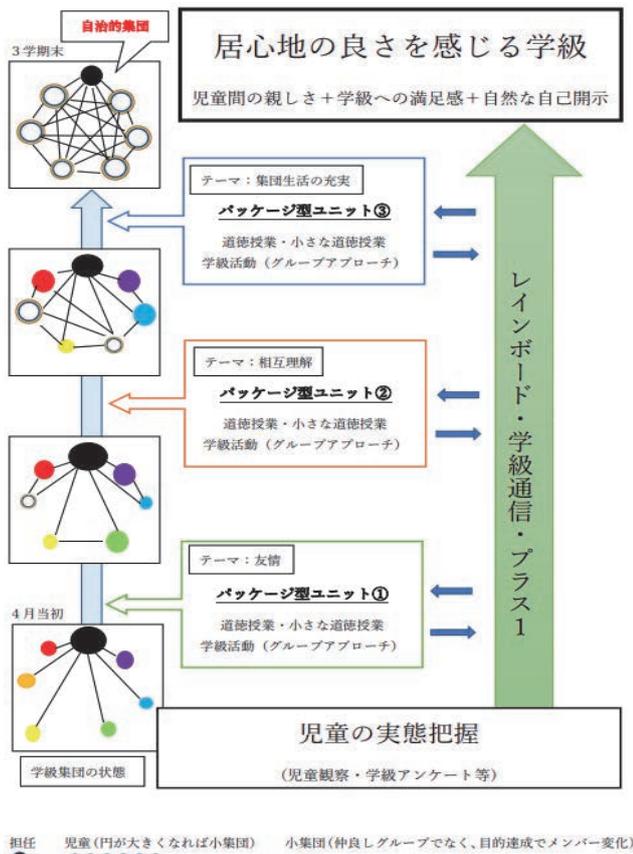
④プラス1【仮説②】

「プラス1」とは、毎日自分ががんばったことを

記録していくものである。一週間記録し、金曜日にはグループで交流し合い、互いのがんばりに対してコメントを書き加えていく。この取り組みを通して、互いの良さを知り、相手への肯定的な捉えを促したり、その良さを真似したりする児童が出て、学級全体での質を高めるための相乗効果を促す。さらに、自分がかんばったことに対して、他者から肯定的なコメントをもらうことで、自分の言動に自信をつけられるようにする。

児童の言動に対して、意味づけと評価をするために毎週末教師が児童の記録にコメントをする。

3 研究構想図



4 検証方法

- ・ Q-Uや学級アンケート
- ・ 道徳の時間のワークシート (授業の気づき, 感想等)
- ・ 児童の活動の様子・発言・つぶやき

IV 研究の実際

1 パッケージ型ユニット

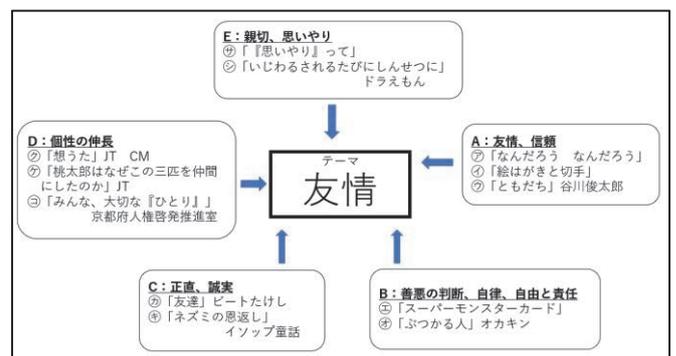
パッケージ型ユニットでの効果を上げるためには、どんな資料を使用し、どんな順番で授業を構成するのか、どのようにねらいを設定するのか、あらかじめ計画を立てることが大切である。

パッケージ型ユニット①について

1学期は、人間関係が浅い時期である。友達に対す

る見方・考え方を深めさせるために、児童にとってより身近な話題である「友情」をテーマにパッケージ型ユニットを行うことにした。本研究では、授業で活用する教材を児童が使っている出版社の教科書教材だけでなく、他社や他学年の教科書教材、本や詩、テレビCMから素材を見つけ、教材化した。素材を選定する視点は、テーマ「友情」に関わるものであるが、内容項目で考えると「友情・信頼」だけでなく、「善悪の判断、自律、自由と責任」「正直、誠実」「個性の伸長」「親切、思いやり」等から資料を探し、よりよい友達関係について児童が多面的・多角的に考えられるような資料を選択した。

下記の図は、教材を決定する以前に考えていた構想図である。



これらの中から、パッケージ型ユニットを通して、児童の人間関係が「個→小集団→小集団同士のつながり」に広がるように考え、次のように資料を並べて、パッケージ型ユニットを設定した。

パッケージ型ユニット① (テーマ: 友情)

	教材名	内容項目	教材ならではのねらい
第一次	小さな道徳 友達 ビートたけし⑥	正直、誠実	友達のつくり方を考える中で、友達とは自分にとって都合のいい人ではなく、見返りを期待せず、相手をどれだけ思うかが大切であるという自分自身の意識の持ち次第であることに気付かせ、友達に対して過度に期待しすぎないようにする意識を高める。
	道徳 なんだろう なんだろう (教科書教材)⑦	友情・信頼	友達と関わることを通じて自分自身が成長していくことに気付くことで、これからもっといろいろな人に関わろうとする意識を高める。
第二次	学級活動 すごろくトーク キング	(自己開示)	テーマに沿って自分の事を話すことで、もっと知ってもらおうとする意識を高めると共に、相手に興味を持ちながら聞くスキルを身に付けさせる。
	小さな道徳 なかよくなる ことば 宮下真 *追加教材	友情・信頼	気が合ったり、よく話したりして自分に都合のいい人が友達なのではなく、悪いところも互いに認め合える人の存在が大切であることに気付かせ、他者のいろいろな面を見よう、認めようとする意識を高める。
	道徳 「思いやり」って (教科書教材)⑧	親切・思いやり	よかれと思って行う自分の言動が、相手を悲しませる場合もあることに気付かせ、本当に必要なことを相手の立場に立って考えようとする意識を高める。
	学級活動 いいとこ四面鏡	(相互理解)	相手のいいところを伝え合う中で、新たな良さに気付いたり、もっと相手のことを知りたいと思ったりする意識を高める。
第三次	小さな道徳 想うた JT CM ⑨	個性の伸長	自分とは違うタイプの人であれ、違うからこそ成長できることや互いを思い、認め合うことが大切であることに気付かせ、いつも一緒にいる仲良しグループ等上辺だけの仲間づくりや付き合いではなく、苦手な人とも互いのことを思い、認め合えるような友達関係を作っていくようとする意識を高める。
	道徳 絵はがきと切手 (教科書教材)④	友情・信頼	友達の違いを指摘することは友達のためになることに気付かせ、相手のことを思うからこそ、言葉を選んで言いくいことも伝えようとすることや素直に友達の言葉を受け止めて自分を成長させようとする意識を高める。
	学級活動 プレイバック会議 (仲直りの方法)	(対人関係)	ロールプレイを通して仲直りの仕方考え、けんかをしても人間関係を良好に保つ方法を考えさせる。

単元計画の立て方

児童の認識の変容を分かりやすくするために、単元の前後で同じ発問をした。今回の発問は「友達とはどんな人だと思うか？」である。児童が自分で考えを比較することができるように、一枚のワークシートに書けるようにした。そのワークシートの裏面には、パッケージ型ユニットで行う1時間ごとの振り返りを書かせた。それによって、自分が考えたことが可視化され、単元後に行う発問に対する考えの手助けとなったり、全体を通した振り返りをしたりすることができる。

このパッケージ型ユニット全体を通して、個→二人(複数)→大人数へと関係性が深まるように考え、単元を組み立てた。

第一次は「個」、友達に対する考え方やなぜ人と関わった方がいいのか等、自分自身の考えを見つめ直させる時間である。友達がいない時期やその時の自分にとってはマイナスに思うかもしれないことにもすべてに意味があることを捉えさせることで、これから起こる様々な経験を前向きに受け入れることができるようにさせたい。

第二次「二人(複数)」では、学活で他者に興味を持たせる活動を行うことをきっかけとして、他者に対する様々な見方を持つとする意識を高めさせる。他者の良いところだけでなく、悪いところまで受け入れたり、「相手のため」の行動をしたりするためにはどうしたらいいかを考えさせていく。相手のことをもっと知りたいという意欲や自分は他者からどう見られているかと疑問を持たせたところで、二つ目の学活を行い、実践させる。

第三次「大人数」では、誰も一度は自分とは違うタイプの人と出会ったり、友達とケンカをしたりしてしまった経験があると思われるので、そこをどのように捉え、どう修正していくのかを考えさせる。小さな世界(グループ)に留まることなく、多くの人と積極的に関わろうとする意識を高めさせる。

教材には、友達と関わる中で起こる様々な葛藤も描かれている。パッケージ型ユニットを通して、一つの考えに偏らず、多様な見方ができる柔軟性を身につけてほしいと考えた。

パッケージ型ユニット②について

児童同士の交流が少しずつ活性化し、気心の知れた者同士で小集団を形成したり、小集団同士がつながったりするようになった。しかし、些細なことで言い争いになったり、少しの違いを気にして相手と距離を取ったりする児童もいたため、互いの考えや良さを受け止め、認め合える関係づくりや分かり合うための意識づけをはかりたいと考え、2回目のパッケージ型ユニットのテーマを「相互理解」とした。そして、次のようなパッケージ型ユニットを設定した。

パッケージ型ユニット② (テーマ: 相互理解)

	教材名	内容項目
第一次	道徳 つまらなかつた (教科書教材)	相互理解、寛容
	小さな道徳 宇宙兄弟 (小山宙哉 講談社)	個性の伸長
第二次	学級活動 ぼくのニセモノをつくるには (ヨシタケシンスケ プロダクション)	(自己理解)
	小さな道徳 いろんな見方ができる人は 誰かの味方になれる人 (人権新聞)	よりよい学校生活、 集団生活の充実
	学級活動 無人島 SOS	(自他の比較)
	道徳 貝がら (教科書教材: 3年教育出版)	友情、信頼
第三次	小さな道徳 ライバル (ジャーナイズ 広告)	公正、公平、社会正義
	道徳 今度はぼくの番かな (教科書教材: 3年教育出版)	相互理解、寛容
	学級活動 探偵ごっこ	(他者理解)

単元計画の立て方

今回の単元前後に行った発問は「だれかと分かり合うために必要なことは何だろうか？」である。全体を通して、第一次「問いかけ」→第二次「自分を知る→相手を知る」→第三次「互いの良さを認める」というように関係性を広げ、個から他者へと深く考えられるようにした。以下に、時間ごとに細かく説明していく。

第一時は、「言葉足らずだと誤解を生み、人間関係が悪くなること」から、「言葉足らずにならないようにするための心構え」について考える。第二時の小さな道徳では、一人一人個性が違うからこそ、「どのように他者の良さを見つけていくことができるか」について考える。ここが第一次「問いかけ」部分である。

次が第二次「自分→相手」の部分であり、第三時は、相手を知る前に、まずは「自分について知る」ための学活を行う。自分自身について客観的に分析し、自己を見つめ直させ、記入したワークシートを掲示し、他者を知るきっかけづくりも行う。第四・五時は「自分+相手を知る」時間とし、いろいろな見方をすることの良さを考えさせることで、多様な見方ができるように意識づけた後に、学活で互いの考えを認め合えるような実践を行う。第六時は「相手を知る」時間とし、自分との違いを知らないからこそ誤解が生じることに気付かせ、「相手を知る」必要性について考えさせる。

第七時以降は、第三次「互いの良さを認めていく」時間とした。相手がいるからこそ自分も成長できることに気付かせ、互いに分かり合うために必要なことが何かを考えさせる。そして、学活で互いのことをより詳しく知ろうとする態度を身につけさせるための実践を行って終わりとした。

自分に自信を持ってない児童にとって、他者からの承認は自信を持つきっかけになる。自分の良さを感じるためにも、他者からの励ましによるところは大きいだろう。自分には自分の良さがあり、人にはそれぞれその人の良さがある。それを互いに理解し合い、認め合うことの大切さについての考えを深めさせたい。

パッケージ型ユニットの良さは、一度の授業で児童が捉え足りないと感じたときには、次の授業で再度押さえることができる点にもある。以下にその授業についても記していく。

2 授業の実際

(1) 実践① 小さな道徳授業

「なかよくなることば」(6月15日実施)

資料	宮下真「なかよくなることば」長岡書店
めあて	気が合ったり、よく話したりして自分に都合のいい人が友達なのではなく、悪いところも互いに認め合える人の存在が大切であることに気づき、他者のいろいろな面を見よう、認めようとする意識を高める。

資料の選定理由

当初の計画にはなかった資料(授業展開)である。テーマを「友情」にしたパッケージ型ユニットを行って行く中で、1回目の道徳授業「なんだろう なんだろう」では、十分にねらいに迫ることができなかった。ねらいは「友達と関わることで自分自身がより成長することに気付かせる」ことが前提だったのだが、発問が甘くなってしまい、「友達はたくさんいたほうがいい」という意見が多く出てしまった。たとえ友達が少なくても、ケンカをしてしまうことがあっても自分自身の成長にはつながるという考えをもたすことができなかった。感想にも「友達を増やすためにも、自分からもっと声をかけていこうと思った」「なるべくケンカしたり、泣いたりしないように、相手の気持ちを考えて行動しよう」という意見が出てしまった。これでは、日常的に起こり得る場面をマイナスにしか捉えることができなくなってしまった。そうさせないために、次の小さな道徳授業で再度「なんだろう なんだろう」を提示し、別の視点から見させていくこととした。さらに、良いところだけを見て付き合うのが友達なのではなく、悪いところまで認め合えることが友達であるという新たな認識を与えるために、今回の資料を追加した。

授業の実際

「なんだろう なんだろう」の絵を提示しながら、児童の中から出た意見「友達は多い方がいい」は、「可能性が広がるからいい」と意味づけをして示した。その後、友達がねこしかいない時期の絵に注目させ、次の発問をした。

発問1：友だちがいない時期がある。この時期は何も成長できないのだろうか。

この発問には○×で答えさせることで、全員が自分の意見が持てるようにし、理由を考えさせた。そして「泣いたり、笑ったり、ケンカしたり」といういいことも、マイナスに思うことも全て自分自身の成長につながっており、意味があることを示した。そして、「いいところ」「だめなところ」を空欄にしたまま、次の言葉を紹介した。「いいところも、だめなところも、好きになるのが友だちだよ」。児童は、空欄に当てはまる言葉は何かと様々な意見を言い合

いながらも最終的に示された「いいところ」「だめなところ」には「そうなんだ!」「あー、分かるかも」と納得した様子だった。その後、次の発問をした。

発問2：相手のだめなところに気付いた時、自分ならどうしますか。

最後に、宮下氏の「私たちはその長所よりも、短所によって、友を知るのです。・・時々、相手のだめなところをカバーするために、力をかけてあげたり、逆に助けられたりする。そうして、どんどん仲がよくなっていくのが、友だちなんだね。」という言葉を紹介し、感想を書かせて授業を終えた。

授業の成果と課題

授業の感想には、「友達の悪いところを見つけた時に注意しすぎるのも良くないなと思いました。少しだけ注意するぐらいがちょうどいいと思いました」

「友達の短所を見つけるだけじゃなくて、助けてあげると仲良くなれるのかと納得しました」「友達がいたほうがいいけど、いなくても成長できるから、あせらなくてもいい。もっと周りを見ていこうと思った」等が書かれていた。

これらの感想から、友達のちょっといやだなと思うところも認めて、受け入れていこうとする意識が高まり、さらにいろいろな面を見ていこうとする意欲につながったと捉えることができる。

しかし、感想の中には、「いろいろな人と友達になることが大切だと思います」と書く児童もみられた。全員がねらいに迫ることができる発問をつくることが課題である。

今回の授業を通して、パッケージ型ユニットの良さを改めて感じた。それは、児童の実態に合わせて、資料や発問を臨機応変に変えられることである。一度の授業で捉えきれない場合に、再度別の方向から資料を提示し、新たな視点を与えることでよりねらいや、大きなテーマに迫ることができた。

授業後の子どもの変容

児童Yは、「いいところも悪いところものところがいいと思った。なぜなら、いつも〇〇にちょこちょよされる時があるけど、そういうところも好きだからです(ちょっといたいけど)」と感想を書いた。日頃の行動をふり返り、ちょっと苦手だと思っていた級友の行動を受け入れることができた様子が見られる。その後、休み時間に二人の様子を見てみると、くすぐられた児童Yが「もう少しやさしくやってよー。」と言いつつ、「ま、そういうところも好きなんだけどね」と笑顔で話し、二人でじゃれ合っていた。互いの良いところだけではなく、苦手な部分も受け入れ、より一層仲が深まっているようだった。

(2) 実践② 道徳授業「つまらなかった」

(9月29日実施)

資料	「つまらなかった」教科書教材
めあて	言葉足らずでいたために、誤解が生まれ、すれ違う登場人物の姿に気付くことで、相手の気持ちを考えようとしたり、相手からの理解を得られるように自分の思いを言葉で伝えたりしようとする意識を高める。

授業の実際

導入では、教材に興味を持たせるために、教室前面にあるスクリーンに紙芝居形式で挿絵を提示し、発問1を行った。

発問1：二人に何があったと思いますか？

数名に発表させた後、本文を範読した。

発問2：二人がぎくしゃくしてしまっているが、悪いのは誰だと思いますか？

二人の登場人物、それぞれに悪いところがあるのだが、それに気付かせるためにも、どちらも悪い・どちらも悪くないの二つを追加し、A～Dと4つの選択肢を与え、全員が答えることができるようにした。そして、その選択肢を選んだ理由も書かせ、その意見を板書することで、考えが明確になり、自分と他者の意見を比較ができるようにした。

発問3：こうなってしまったのは、二人の間に何が足りなかったからだと思いますか？

互いに言葉が足りなかったことや相手の気持ちを考えることが不十分であったことが原因であることに気付かせるために、板書してある発問2のキーワードに再度注目させた。そして、「言葉足らず」だと「誤解が生まれ」「人間関係が悪くなる」ことをおさえた後、「言葉足らずになってしまう原因は何か」と発問し、「仲がいいからこそ、言わなくても分かってくれる」と思い込んでいることに原因があることを気付かせた。そして、次の発問をした。

発問4：言葉足らずにならないようにするために、言葉で伝えるときや相手の言葉を聞くときに、気を付けると良いと思うことはありますか？

今後の心構えにするためにも「伝えるとき」「聞くとき」に分けて板書を行った。その後、自分にふり返って考えさせるために「信二とさとしのようになりたいですか？」と問いかけた上で次の発問をした。

発問5：仲の良い友達と、休み時間は別々で過ごすということにならないために、自分はどんなことに気をつけますか？

なかなか書けない児童には、板書されている意見の中で、一番気を付けたいことや登場人物から学んだことを書くように伝えた。授業の中で、個々の考えを深めるために、ペアで話し合う時間も取り入れた。互いの意見を聞き合ったり、板書で視覚的に他者の意見を読み取ったりすることで、自分と他者の意見とを比較することができ、多面的で多角的な考

えを持つことができた。

今回の授業では、発問5に対して、児童Sが「自分から話すことより、友達のおしゃべりを聞く方が好き。だから、あまり自分から話そうとは思わなかったけど、相手の意見を受け止めたら、自分の気持ちも伝えた方が相手とより仲良くなれるような気がした。だから、もっと自分の気持ちを話そうと思った」という意見を出した。児童Sが発表したこの意見に「なるほど！そうかも」「確かにもっと話してくれたらうれしいな」と言ったり、大きくうなづいたり多くの児童が共感していた。これらのことから、ねらいに迫ることができたと考える。

授業の成果と課題

授業の感想には、次のように書かれていた。「伝えるときに相手が分かるように伝えないと、相手がかん違いをしてしまうかもしれないから、分かりやすく伝えることは大切だと思った」「話を聞いたり、伝えたりするときに大事なことがあるんだと分かった」「相手に分かりやすく伝えたり、気持ちを考えて聞いたりすることが大切だと分かったから、友達や家族にもこれを使ってみたい」これらのことから、今まで特に意識することなく、他者と話をしていた児童が、話す・聞く際に大切なことに気づき、今後の生活に活かそうとしている姿が分かる。

しかし、感想文の中には、「伝えるときには怒らないようにしたい」という内容もあり、資料の表面的な内容しか読み取ることができていない児童もいた。できるだけ多くの児童が深い学びをする工夫が課題である。

授業後の子どもの変容

自分の気持ちは言わないと伝わらないから、気が付いたら言おうとする意識が芽生えた結果、帰りの会の「いいところ見つけ」で発表する児童が増えた。そして「たくさんの子が発表したがっているし、みんなの意見を聞きたいから、もっと早く帰りの準備をして『いいところ見つけ』に時間が取れるようにしましょう」と呼びかける児童も出てきた。その甲斐もあり、準備時間が早くなり、男女問わず多くの児童が級友のいいところを伝えるようになった。

(3) 実践③ 学級活動

「ぼくのニセモノをつくるには」(10月1日実施)

資料	「ぼくのニセモノをつくるには」 ヨシタケシンスケ ブロンズ新社
めあて	自分の好きなことやできること、嫌いなことやできないこと等を自分の言葉で書き記す活動を通して客観的に自己分析をし、改めて自分のことを見つめ直す。



「探偵ごっこ」(10月14日実施)

めあて	友達のことをより詳しく知ろうとする態度を身につけさせ、級友の新たな一面を知る機会にする。
-----	--

資料選定の理由

「ぼくのニセモノをつくるには」は、2回目のパッケージ型ユニットの中で、「自分」について考えさせるための実践として行った。この資料で主人公は、自分のニセモノになってもらうために、ロボットに自分のことを詳しく説明していく。読み進めていく中で、児童も主人公と同じように「自分」について考えることができる。また、この主人公は自分の短所について否定的に捉えるだけではなく、そんな自分も受け入れ、楽しんでいる様子も見られる。そのため、あまり自分に自信を持ってない児童にとっても自分の良さだけでなく、短所を受け入れ、一人ひとりが自分の個性を見つめ直すことを通して、自分は唯一無二の存在であると再認識することもできる資料であると考え、選定した。

そして、自分について書かれたワークシートを一定期間教室内に掲示し、他者の個性についても知ることができるようにした。その後「探偵ごっこ」を行った。これは、掲示したワークシート内に書かれた情報をもとに、誰のことかを当てるアクティビティである。知っているようで知らない級友のことを掴むきっかけづくりや、他者のことをより詳しく知ろうとする意識を高めるために行った。

授業の実際

「ぼくのニセモノをつくるには」の際には、今回の単元全体を通した発問を引用して、次の発問をしてから、資料を紙芝居形式で教室前面の拡大スクリーンに提示し、読み進めた。

「だれかと分かり合う」ためには、相手のことを知る必要がある。でも、その前に自分は、自分のことをよく知っているのだろうか。
今日は、まず、自分のことについて考えてみよう。

以前考えているテーマをもとに授業を進めたことや資料自体が絵本で、楽しみながら読み進められるものだったこともあり、児童は身を乗り出して見入っていた。そして、資料も参考にしながら、自分の「好きなことやできること、嫌いなことやできないこと」についてワークシートに書き進めた。前時の小さな道徳授業の中で、「相手のことを知るためには自己紹介をするといいいのではないか」という意見もあったため、そこからのつながりを持ちながら、相手にもっと自分のことを分かってもらうためにも、この一時間は自分で自分に向き合う時間とし、誰かと相談することなく、一人で書くこととした。

記入したワークシートは一定期間教室内に掲示した。後日、このワークシートをもとにした「探偵ご

っこ」を行うことも伝えていたため、より熱心にワークシートを見ては、「これが好きだったとは意外だ!」「自分と同じことが苦手な人がいて、安心したよ」等を言い合っていた。

そして、「探偵ごっこ」を行った。下記のように話し、友達を知ることの大切さを教えて、動機付けをした後に、実践した。

このクラスの友達のことをどれくらい知っていますか?クラスの友達のことをもっと知ることができたら、みんなもっと仲良くなれると思います。今日はみんなのことをよく知るための活動を行います。

掲示してあった情報をもとに、クイズを出し、児童にこれは誰のことかと考えさせた。互いのことを知り、理解しようとする中で、自然と笑みが生まれ、学級全体があたたかい雰囲気になった。

授業の成果と課題

授業の感想には、「自分の班の時に、自分が一番怪しまれていたけれど、そういう人じゃないと分かってくれている人もいて良かった」「いろいろな人の特徴が分かったし、まさかと思うこともあって笑ってしまった。みんなの知らなかったことが知れてよかった」等が書かれており、楽しみながら級友の新たな一面を知るきっかけになっていた。

また、「いろいろな人の特徴や好きなものが知れて楽しかったから、もっと友達同士でやりたいと思った。そうしたら、もっともっとその人のことがよく分かって、仲良くなれる気がする」「仲のいい友達でも分からなくてびっくりしたことがあったから、普段からもっとよく話をしたり、もっと相手のことを見たりして、見分けられるようになりたいと思った」「分かった人も、分からなかった人もいた。もっとたくさんの人を知りたいと思った」と書いている児童もおり、自分たちですぐにやれる活動だからこそ、自分たちでも行い、新たな一面を発見したいという意欲につながった。実際に次の休み時間に近くにいる児童に声をかけて、お題を決めて互いに自分の好きなことや得意なことを言い合っている児童もおり、新たなつながりができるきっかけになっている。

級友の新たな一面を知るきっかけづくりとしての成果は果たせたが、自分の短所を受け入れ、楽しむ意識までは持たせることができなかった。これは、今回の授業がきっかけづくりに重きを置いた発問や実践になってしまったからである。自分の短所を受け入れることができるようにするためには、また別の視点での実践が必要である。

授業後の子どもの変容

感想に「あまり話したことがない子が、実は自分と同じアニメが好きなことが分かったから、今度そ

の子に話しかけてみたい」と書いている児童がいた。早速、次の休み時間に話しかけており、今まであまり一緒にいるところを見なかった二人が、今では下校後にも時々遊ぶようになったようだ。保護者からも「今まであまり名前を聞いたことがなかったし、タイプが違う子だったから、一緒に遊ぶようになってびっくりした。それでも、あんまり知っている人がいなかった、自分の好きなアニメを同じように好きだったから、気が合うのだと思う」と言われた。自分とは異なるタイプの人ともつながるきっかけづくりになった。

3 授業での学びと日常をつなぐ

パッケージ型ユニットを行ったことで、児童が周りをよく見るようになった。特に、2回目の「相互理解」をテーマにしたパッケージ型ユニットを通して、「周りの人の悪いところだけではなく、良いところを見つけよう」「いつも一緒にいる子だけではなく、いろんな人に話しかけよう」「言葉足らずだと誤解を生んでしまうから、きちんと自分の気持ちは言葉で伝えよう」という意識が高まった。その意識が、児童の言動になって現れてきたのが下記の出来事である。

(1) レインボード

1学期は児童のいいところや成長した様子を掲示してきたが、2回目のパッケージ型ユニットを終えた頃から、児童も書くようになってきた。きっかけは、児童の中から「今日一日でみんなのいいところをたくさん見つけた。道徳の時間に、気持ちは言わないと伝わらないってあったからいっぱい伝えたいんだけど、帰りの会の『いいところ見つけ』で紹介すると時間がかかりすぎるから、どうしよう」と相談されたことが始まりだ。「紙に書いて、レインボードに貼ったらどうか」と提案すると、「やりたい！」と言って紙を家に持って帰り、次の日にすぐ持ってきた。児童Aが持ってきた紙は、すごくカラフルで、たくさんの級友のいいところが書いてあった。それを朝の会で紹介してレインボードに貼ると、「すごい！こんなにたくさん見てくれていたなんて嬉しい！」「分かる！この子の行動ってすごいと思っていたけど、言わないと伝わらないから、私も今度伝えてみよう」等、口々に言いながら、笑顔で見合っていた。

また、児童Aに自分のいいところを書いてもらって嬉しいと言っていた児童Yが次の週に、同じように他の子のいいところを書いてきた。自分がしてもらって嬉しかったことを他の子へもつなげようとしている姿も見られた。

児童Aに話を聞いてみると、「道徳で『自分の気持ちは言葉にして伝えないとうまく伝わらないこと』『みんなちがうから、いろんな子の悪いところだけ

ではなく、良いところをたくさん見つけていこう』と話していて、そうだなと思ったから、自分でもやってみた。そうしたら、みんなもすごく見てくれて『ありがとう』『いっぱい見てくれて嬉しい』と笑顔で話しかけてくれたから、もっと嬉しくなったよ」と笑顔で話してくれた。

道徳で考えたことをすぐに実践にうつし、それを級友も認めてくれたことで、またやりたいという気持ちにつながっていた。その輪がどんどん広がり、今ではレインボードに自分たちで良いところを見つけて、掲示することが多くなっている。

(2) プラス1

同じグループの子が頑張ったことに対して、週末にコメントを記入させているが、「すごいね！」と言しか書いていなかった児童が、道徳を行った後には「ぼくはあまり図工で仕組みを覚えられなかったのに、すごいね！」「ぼくは算数の授業であまり手をあげられないのに、たくさんなんてすごいね」と具体的なことまで書けるようになった。さらには、友達を書いてくれたコメントに対し、「みんな、いろんなコメントありがとうね！」と感謝を伝えるメッセージまで書くようになった。児童に話を聞いてみると、「書かなくても一言あれば分かってくれるかなと思っていたから、めんどくさいし、書かなかった。でも、道徳で言葉足らずだと誤解を生むこともあるとやったし、きちんと言わないと自分の気持ちは伝わらないのかもしれないと思ったから、ちゃんと書こうと思った」と言っていた。

また、国語のテストで「がんばる4年4組」というテーマで記事を書くとしたら何を書くか問われた時に、「プラス1」と書いている児童がいた。テストで記されていた理由には「最初は一言だったが、あたたかい言葉が増えたから」と書いてあった。詳しく聞いてみると、「道徳で、周りのことを見て、相手の悪いところだけではなく、良いところを見つけようとしたおかげで、みんなが良いところを見つけてくれるようになった。だから、あたたかい言葉が増えていると思った。授業でやったことを実際にみんながやっていて、『がんばる4年4組』にぴったりだと思った」と言っていた。

道徳の授業で考えたことを実践している姿を互いに認め合っていると感じた。

4 若手教員の実践

同学年で担任をしている3年目の若手教員に、筆者が組み立てたパッケージ型ユニットを行ってもらった。今回は道徳の授業のみで行ったため、3時間の授業構成である。学級の実態や雰囲気異なるため、同じテーマでも教材を変えて行った。以下に示すものが若手教員の学級で実施したパッケージ型ユニットである。

1回目のパッケージ型ユニット（テーマ：友情）

教材	内容項目
友達（ビートたけし）	正直，誠実
なんだろうなんだろう	友情，信頼
ドッジボール	善悪の判断，自律，自由と責任

2回目のパッケージ型ユニット（テーマ：相互理解）

教材	内容項目
つまらなかった	相互理解，寛容
貝がら	友情，信頼
今度はぼくの番かな	相互理解，寛容

この学級では2回目のパッケージ型ユニットを行っている最中に、言葉足らずなことが原因でケンカになってしまう場面が実際にあったのだが、そのことに気付いた児童が「言葉が足りないと本当に誤解しちゃうんだね」「だから言葉はちゃんとと言わないとダメなんだね」「道徳でやったことって本当だったんだ。道徳ってすごい」としみじみ語っており、実際に体験して意識できることで、より一層児童の中に浸透していた。

若手教員も、「単発だと児童の変化が分かりにくいだが、大きなテーマのもとに様々な視点で授業を行うことで、より考え方を新しく与えられたり、意欲を生ませたりすることができて良かった」と言っており、児童の実践意欲の高まりを感じることができているようだった。

さらに、実践前後で同じ内容で発問したのだが、自分に置き換えて考えることができる児童が増え、その変化に児童自身が気付くこともできており、一回だけの授業よりも、自分自身や学級全体での成長を実感することができているようだった。

これらのことから、学級の実態に合わせてパッケージ型ユニットを組み立てることで、誰がどの学級で行っても、成果が出る取り組みであると考えられる。

V アンケート結果と考察

(1) 月末の振り返りアンケート

毎月末に行っている「学級に関するアンケート」の中で書いている「今月、一番がんばったことや成長したこと」に、2回目のパッケージ型ユニット実施直後の10月末に「みんなと気軽に話せるようになった」と書いている児童がいた。詳しく聞いてみると、「誰が何と言おうと自分で確かめることが大事だと道徳をやったから、いろいろな子に話しかけてみるようにした。そうしたら、実は面白い子とか、意外と趣味が合う子がいて、今まで仲良くなかった子とも気軽に話せるようになった。ドキドキしたけれど、勇気を出して話しかけてみて良かった」と言っていた。道徳で考えたことを活かし、自分なりに実践している姿が見られた。道徳での認識の変容が実生活で生きていた。

また、10月末の時点で33人中9人の児童が「今までより授業で手を挙げるようになった」

と書いていた。そう書いた児童たちは、「間違っことを言っても受け入れてくれそうな気がしたから、自信をもって手を挙げられるようになった」「何を言ってもみんな笑ったりしないし、ちゃんと自分のことを受け止めてくれると思ったし、自分の意見はちゃんと伝えようと道徳をやったから、がんばって手を挙げているよ」と言っていた。

パッケージ型ユニットやレインボード、プラス1といった日々の実践を通して、学級全体があたたかい雰囲気になっていることや互いの良さや違いを認め合えるようになっていたり、相手に誤解を与えないためにも自分の思いを言葉で伝えようという意識が高まったりしているからこそ、自分の思いを伝えることができるようになったのだと考える。

(2) 学級風土アンケート

児童の人間関係と学級風土の変化を測定するための実態調査紙は、以下のものを使用した。（4件法）

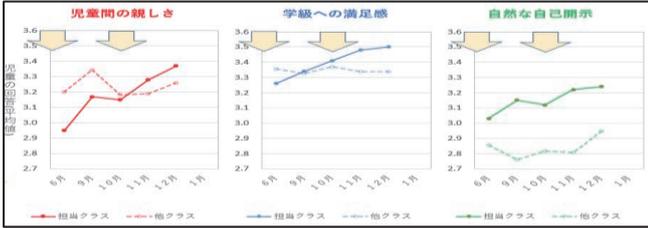
このクラスは、おたがいにとても親切だ。	児童間の親しさ
このクラスの男子と女子は、仲がいい。	
このクラスでは、みんな仲がいい。	
このクラスでは、友だちどうし助け合う。	学級への満足感
このクラスが気に入っている。	
このクラスになってよかったと思っている。	
クラスみんなに会うのを楽しみにしている。	自然な自己開示
このクラスは心から楽しめる。	
自分の気持ちをすなおに先生に言える。	
クラスの友だちに自分のことを安心して話せる。	自然な自己開示
このクラスは、自分たちの気持ちを気軽に言い合える。	

このアンケートは毎月末に実施している。パッケージ型ユニットは6月と10月に実施したため、6月末以降の児童の人間関係や学級風土の3側面でのそれぞれの数値の変化は次の通りである。

	6月	9月	10月	11月	12月
親しさ	2.95	3.17	3.15	3.28	3.37
満足感	3.26	3.34	3.41	3.48	3.50
自己開示	3.03	3.15	3.12	3.22	3.24

アンケート項目においては数値が安定していない項目もあり、そこでの効果が実践後すぐに表れたとは言い難い。しかしながら、全ての項目において徐々に数値が上昇している。下記のグラフのように、パッケ

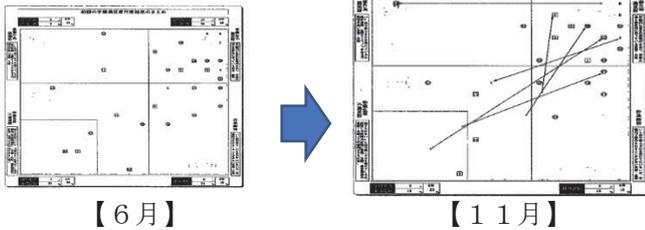
ージ型ユニットを実施しなかった同学年他クラスでは数値的变化はあまり見られなかったため、パッケージ型ユニットだけでなく、日々の実践の効果があつたと考えることができる。アンケート実施直前の人間関係の影響もあるだろうが、学級全体としては確実に仲を深め、「居心地の良い」学級になっている。



特に、「自然な自己開示」での項目の数値が他クラスに比べて高い。自分のことを安心して話せるようになるためには、互いに受け入れ、認めてくれるという意識がなければできない。これらのことから、互いに認め合っていると考えることができる。

(3) Q-U

下記に示す資料が6月と11月に実施したQ-Uの結果である。



バラバラだった学級が少しずつまとまってきた様子が分かる。11月実施の結果では、特に「いごちのよいクラスにするためのアンケート」結果の中で他クラスとの差が大きく出た項目がある。

- 1, 運動や勉強等でクラスの人から認められることがある
- 2, 失敗したときクラスの人が励ましてくれることがある

以上のことから、本研究の取り組みによって、互いの良さや考えを認め合うことができるようになり、協力し合って学級生活を過ごす意識が高まったと考えられる。

VI 研究の成果と課題

(1) 成果

本研究では、二つの仮説に対して、成果を上げ、互いの良さや考えを認め合い、自他の成長のために協力し合おうとする意識を高めることができたのではないかと考える。

本研究に取り組むきっかけになった場面は、現在あまり見られない。級友が些細な失敗をしてしまっても「そういうこともあるよね」「失敗してくれたおかげで、自分もこれから気をつけようと思えたよ」と声をかけ合う姿も見られる。たとえ、「それ違うよ!」と強い口

調で言いかける児童がいた場合でも、「やさしく言おうよ」と笑顔で言う児童もおり、その場が和むこともしばしばである。自分の考えを受け入れてもらう経験を多くしてきたことで、授業中に挙手をして自分の考えを発表する児童が増えた。「話している人の顔を見る」「相づちを打つ」等が自然にできるようになり、児童の発言によって学級全体があたたかい雰囲気にも包まれることも多い。

さらに、学級風土アンケートの結果から、実践を行った学級と行わなかった学級を比較し、有意差検定(T検定)を実施したところ、4月時点ではなかった得点差が、12月末の時点では表れていた。実践を行った学級の方が、実践を行わなかった学級より有意に「児童間の親しさ」「学級への満足感」の得点が高くなったのである。また、実践を行った学級のみ、4月時点に比べて12月末の時点の「児童間の親しさ」の得点が上昇していることが統計的に明らかになった。このことから、統計的に見ても有意差が認められた。

(2) 課題

Q-Uの結果を見ると、少数ながら級友からの侵害行為で苦しんでいる児童がいる。自他を受け入れ、認め合う関係性を築いてきてはいるが、まだ十分ではない。今後も一人ひとりを的確に把握し、それぞれに寄り添った支援を工夫していく必要がある。

また、道徳の授業のワークシートを読むと、資料の表面的な部分しか読み取ることができなかった児童がいると考えられる。ねらいや発問の設定が不十分であったり、児童のつぶやきをうまく拾って、全体に切り返すことができていなかったりすることが原因だと考える。教材ならではのねらい、ねらいに迫る発問を意識して授業を組み立てること、全体への切り返し方等が今後の課題である。

【主な引用・参考文献】

小野田亮介(2012)「初等教育において習慣化可能な作文課題および実践方法の検討ーリレー作文を使用してー」教育心理学研究, 60, 402-415
 品田笑子(2016)「一人ひとりが「小さなよさ」を発揮でき、認め合える学級づくり」児童心理 11月号, 第70巻 17号, 44-49
 柳沼良太(2013)「道徳の時代がきた!道徳教科化への提言」教育出版
 田沼茂紀(2017)「パッケージ型ユニットでパフォーマンス評価 道徳授業のつくり方」東洋館出版社
 鈴木健二(2017)「道徳授業をおもしろくする!〜子どもの心に響く道徳づくりの極意」教育出版
 品田笑子(2017)「思いやりを表現できる学級づくり」児童心理 7月号第71巻 10号, 40-46
 伊藤亜矢子, 松井仁(2001)「学級風土質問紙の作成」教育心理学研究, 49, 449-457